

【 たかの つぎ 】

鷹野つぎ

1890年（明治23）年～

1943年（昭和18）年

浜松市が生んだ近代の女流作家。

結核病で約20年間も療養生活を送りながら執筆活動を続けた。

子どもは8人中5人（最終的には6人）を事故や病気で亡くした。



鷹野つぎ

浜松時代

つぎは、浜名郡浜松町下垂町（現浜松市中区尾張町）に父岸弥助、母なをの二女として生まれた。本名を次といい、家業は油雑貨商、兄3人、姉1人、妹3人の8人兄弟であった。

浜松町立浜松尋常小学校を経て浜松女子尋常高等小学校高等科へ進み、1904（明治37）年には浜松町立浜松高等女学校に入学した。



母校浜松市立高校にある鷹野つぎの「ふるさとよ 浜松…」の文学碑

幼いときから読書好きの文学少女であったつぎは、19歳の頃には文芸雑誌へ小説を投稿していた。

この頃、鷹野弥三郎（長野県佐久郡北牧村出身）という新聞記者と知り合い、弥三郎との新生活を名古屋で始めたのは1909（明治42）年、つぎが20歳のときであった。当時の浜松の風習としては、女の学問は女らしからぬ女をつくるものと思われていた時代であった。

地方時代（名古屋、豊橋、沼津、福島）

名古屋新聞に勤務の弥三郎との名古屋での暮らしは、

1912（明治45）年2月までの3年半であり、その間に長男正弥が生まれた。

同年3月、弥三郎の転勤により豊橋支局へ移り、一家は約2年半豊橋で生活をした。この間、二男次弥、長女参弥子が生まれたが相次いで亡くした。

1914（大正3年）秋、弥三郎が報知新聞社に入社したため、転勤により沼津や福島、東京へと転居した。

東京時代

1917（大正6）年東京に移ったとき、つぎは28歳であった。それからの27年間は、東京という地の利を得てつぎの作家としての名が世に出た時代であった。

やがて島崎藤村と知り合ったつぎは、文芸誌「処女地」に同人



『悲しき分配』
鷹野つぎ／著
船橋治／発行



『子供と母の領分』
鷹野つぎ／著
古今書院／発行

として数々の短編を掲載した。

1922（大正 11）年から毎年のように作品を発表するようになり、新進の女流作家として徐々に文壇の注目を受けるところとなった。

しかし、1923（大正 12）年 9 月の関東大震災を境に、つぎの運命は暗転する。弥三郎の勤める時事新報社が震災で全焼し、弥三郎は退職を余儀なくされたばかりか、翌年には、つぎ自身が結核に倒れ、以後死に至るまで療養生活を送りながら文筆活動を続けることになった。

また 8 人の子どものうち 5 人が夭折^{ようせつ}し、夫の度重なる失業や窮乏生活など、苦労の連続であった。しかし、そ

んな中でもつぎは多くの作品を発表していった。

代表作

数ある作品の中で、故郷浜松を舞台としたものに、『四季と子供』という随筆がある。序に書かれているように「幼いころの思い出として、七、八歳から十歳前後までの私の記憶を辿ってみた。」作品であり、つぎが子供のころの浜松の生活や行事がわかる美しい作品である。

作品中「ひづるしい（眩しい）」「あたける（乱暴する）」などの方言（遠州弁）が多く遣われており、それは三河弁とも共通する言葉であるところが興味深い。また「豊橋市に近い牛久保の伯父様」という人物が登場する点からも、当時から



『鷹野つぎ著作集 第二巻』
鷹野つぎ／著
谷島屋／発行

遠州と三河の交流が深かったことが窺われる。

1922（大正 11）年出版の小説集『悲しき配分』には、つぎの師事した島崎藤村が序文を寄せている。

つぎの作風について、臼井吉見は、「家庭の主婦が、筆を執り、身边を観察記録したといったふうのものである」といい、『新潮日本文学小辞典』は、「冷徹な観察と緊密で硬質的な表現をもって、人間生活と心理の陰影を彫り深く描いている」と紹介している。（『浜松市史三』より）

1973（昭和 48）年、文学碑が母校である浜松市立高校の校庭に建てられた。それには「ふるさとよ 浜松 はままつは わがふるさと・・・なつかしのはままつ 思いは馳する わがふるさと」と刻まれている。

代表作

著書名	刊行年
悲しき配分	1922（大正 11）年
真実の鞭	1923（大正 12）年
ある道化役	1924（大正 13）年
子供と母の領分	1935（昭和 10）年
幽明記	1940（昭和 15）年
四季と子供	同上
女性の道途	1942（昭和 17）年
娘と時代	1944（昭和 19）年
春夏秋冬	同上

※ 『娘と時代』『春夏秋冬』は、つぎが亡くなってから発行。